

# 母と子

正宗白鳥

青空文庫



封筒の中には長いお札が疊み込まれてあつた。それには××八幡宮玉串と大きな文字が刷られて、その傍に「辰の歳の男<sup>かんしや</sup>瘡<sup>や</sup>性<sup>う</sup>平癒」<sup>と書いてあつた。</sup>

何事を云つて來たのかと、案じながら手紙を開いたおたねは、お札を見るとくすくす獨り笑ひをした。お札の外に御供米が四五粒包まれてゐた。

明ら様に云つては夫が一口<sup>くち</sup>に迷信だ<sup>ごはん</sup>とけなして生<sup>なまごめ</sup>米なんか口に入れないだらうからと、おたねは御飯の中へそつと落して食べさせることにした。そして、知らずに食べてゐる夫の顔を見守つて、ひそかに面白がつてゐたが、やがて笑ひを忍びかねた。

「お國のお母さんが贈つて下さつたものをあなたは今召し上つたんですよ。」と、些つと揶揄氣味で云つた。

「何を？」

良吉は訝しさうに膳の上を見入つたが、其處には故郷から來たらしい食物は一つもなかつた。甘つたるい菜つ葉の浸物に鹽鱒の焼いたのと、澤庵と辣薤とが珍しくもなく並んでゐるばかりだつた。で、妻が何を云つてゐやがるのかと、取り合ないで箸を動かしてゐたが、おたねは何時までも黙つてはゐられなくて、お札と御供米の話をし出した。

「へえ、それは妙だね。」良吉は茶碗の喰ひ餘しの飯を見詰めながら、「××の八幡様といふのは、おれもうろ覺えに覺えてるよ。

馬鹿に石段の高いところだ……。しかし、胃病や肺病の御祈禱をしないで疝性の平癒を祈つたのは可笑をかしいぢやないか。」

「でもお母さんはいゝ人ですわね。早速あなたが頂いたつて御返事を出さなければ。」

おたねは、お札と母の手紙とを夫に見せて、「此家ここには神棚があるのに何にも祭るものがなかつたのだから、このお札を貼はつときますせう。」

「こんなものが貼れるものか。」

良吉はさう云ひながら、直ぐ前に見上げられる神棚へ目をつけた。其處には干物や福神漬や葡萄酒の空あきくわん 罐などがごたくと置かれてあつた。

「おれは小さい時には顔に青筋が出て、酷い疔性で皆んなを手古摺こずらせたさうだよ。炒粉いりこが思ふやうに茹ゆらないと云つて泣き入つたまゝ氣絶して、一時は助らないと思はれたさうだ。だから母親は何時になつてもおれの疔性ばかり氣にしてゐるんだらう。」

良吉はふと頭の頂點てつぺんの禿はげを指して、「疔なほを癒すために漢法醫にハツボとかいふものをかけて貰つたゝめにこんなに禿はげげたのだ。」

「へえ、妙なことをするんですね。」おたねは禿はげよりも頭の眞中に白髪しらがの多いのに初めて氣付いて、「白髪しらがの生えるのもそのせゐか知らん。」と呟つぶやいた。

「それは別さ。」

良吉は厭な氣持がした。頭に霜を戴き顔に皺しわの波をつくるのも

程遠からぬやうに思はれて、一本の白髪を指摘されるのも無氣味であつた。が、

「もうおれも四十になりかゝつてるんだからね。」と事もなげに笑つて、「おれが四十になるといふのは自分に取つちや夢見たやうな話さ。三十過ぎた男をお爺さん見たいに思つたこともあつたのにね。」

「お母さんは幾つでせう。髪は些ちつとも白くはないぢやありませんか。」

「さあ、もう五十五六にはなるだらうね。十七の歳におれを生んだのださうだから。」良吉は久し振りに指を折つて母親の年齢を數へた。

「お母さんは若い時には容色きりやうのいゝ方でしたつてね。お醫者さんのお婆さんがよくさう云つてたつて、お米さんが何時か私に話してゐましたよ。私も屹度きつとさうだつたらうと思ひますよ。今だつて目も鼻もよく揃つていゝ顔立ちをしていらつしやるぢやありませんか。」

「おれは三十前後のころの母の顔をよく覚えとる。不斷の顔はぼんやりしてるが、一緒に旅行した時の顔は今思ひ出してもはつきりしてるよ。大阪へも汽車で行つたし、讃岐の母の實家さとへも船で行つたことがある。まだ汽車なんか不完全な時で、姫路で乗り換へるのに、發車間際になつて切符を賣るんだから大混雑だつた。行列をつくつて切符を買つたのだが、母は財布がどうかしてうま旨く



開かないのに焦れて、齒で引き裂いたが、さうすると金は地へ落ちるし、傍で見て、おれは母の顔が怖かつた。」

道頓堀の角座で先代の左團次一座の芝居を觀た話や、讃岐からの歸りに汽船に乗つて酔つた話などを、食後の頭休めにしてゐたが、良吉の頭の底には、母親に關連したことで、却つて口に出し得ないことに思ひを馳せてゐた。……その頃は父親が四十前後で、家の中にもごたくがあつて、子供心にも陰氣に感じてゐたやうに覺えてゐる。「お父さんは子供のことなぞ何とも思つて居らんから……。」と、目に涙を溜めて云つてゐたことを良吉は覺えてゐる。噉り泣きしてゐた母の顔、物置部屋の隅つこに蹲んでゐた母の姿などが今になつて見ると、痛ましい意味をもつて目の前に

ちらついた。

「おれは母とはしみ／＼話したことはないけれど、母の氣持はよく分る。さう仕合せなんぢやないね。」と、良吉は妻に向つて出し抜けに云つた。その理由は別に云はなかつた。

「先こなひだ日お國へ行つてゐた時に、良吉は黙つてるけど、傍にゐると手頼たよりになると云つてゐましたよ。そして、身體からだとかけ替へで

子供のために働くのだと、お母さんは云つてゐなすつた。子供が皆んな大きくなつたのだから、お母さんも些とは氣樂になすつたらいゝでせうにね。」おたねは同情したやうに云つたが、最早田舎の姑しゅうとの話など立ち入つて訊かうとするほどの興はなかつた。

良吉はお札のことから、ふと昔話などに耽つたが、肉親みうちに關かかは

た話は元から好まないの、妻に向つてさへ滅多に話したことはないのだつた。……愛情が乏しいのか、責任感が深いのか、一種病的なのか、血筋のつゞいた男女の所行を目に觸れ耳に觸れるのが、彼れにはたゞ重苦しく思はれてゐた。小説や活動寫眞に現れてゐる西洋の家庭の親子兄弟の睦まじさうな態度は、物心のついてからの彼れはただの一度も自分の身に經驗したことはなかつた。

瘡性で虚弱であつた彼れは、兩親の並々ならぬ慈愛の下にやうく人並の成長を遂げたのであるが、七つ八つの時分からはどうしても無邪氣に父にも母にも馴染み得なかつた。たとへば母親が何處かへ旅立つた時には、竊ひそかに氣遣つてゐながら、歸つて來ても驅け出して抱き付くといふやうな氣持にはなれなかつた。家の

中が陰氣であつても陽氣であつても、何か物足らないやうな淋しさが彼れの心には付き纏つてゐた。成長するにつれて、その心の淋しさはますます激しくなるばかりだつた。

ある弟が生れて間もなく病死したことがあつた。その時父親が醫者を迎へに行つて來て騒いだり、母親が死骸を抱へて物狂はしく泣いたりしても、何の效ひもなかつたが、良吉は自分が病氣で悩む時だつて同じことだらう、親だつて自分の命をどうすることも出来ないだらうと傍で思つてゐた。

珍しく肉親のことに思ひを馳せ、口にも出したので、良吉の心にはその夜暫らく母親の面影が絡みついてゐた。そして、懐つこ

い手紙でも送つて喜ばせてやらうかと、巻紙をひろげて筆を採つて見たが、どういふものか擦くすぐつたい氣持がして筆が運ばれなかつた。

「おい、お前は故郷くにへ手紙を出したのかい。」と、妻を呼ぶと、  
「今書いてるところです。」と、次の室まで聲がした。

「出す前におれに見せて呉れ。」

「見てどうなさるの？ 書いて悪いことは何も書きやしませんよ。」

「些ちよつと見る必要があるんだ。」

「困つたな。」

おたねは口の中で云つて、書きかけた手紙を初めから読み返し

た。知らせなくつてもいゝ事を知らせるのを、夫が氣にして手紙を見たがるのだらうと、おたねは邪推してゐたが、やがて認め終ると、仕様事なしに手紙を持つて行つた。

「こんな解りにくい字は母は讀めやしない。どうせ誰れかに讀んで貰ふだらうから、おれが見たつて同じことだ。」

良吉は若い女の手紙は、自分の女房のさへ殆んど讀んだことがないので、ぬら／＼した柔やさしい文字を珍しさうに讀み下した。∴「お母かあさん。」と相手を呼び掛けて、さも親しげに無邪氣らしいことが今様の言文一致で書き並べられてゐた。

「さあ、もういゝでせう。」と、おたねは手紙を取り戻さうとした。

「こんな子供臭いことがよく臆面なしに云へるものだね。」

良吉は笑ひ／＼今一度讀み返した。「炬燵こたつに當つていろいろ面白いお話を承うけたまはつたことが夢のやうに思はれてお懐しう御座います。お母さんが東京へ入いらつしやつたら、お米さんや私や皆んなして方々御案内いたしますでせうよ……良吉も無事で毎日机に向つて勉強して居りますから御安心遊ばしませ。毎月の暮しも不由な思ひはいたしませんからお心にお掛け下さいますな……。」

「かう云つとけばお母さんは安心なさるでせう。この手紙を出したつて些ちつともあなたに迷惑になりやしないわね。」と、おたねは自分の注意を誇るやうに云つた。

「さうさ。こんな文句を書いてやつたくらゐで、人間一人を慰め

られるのなら、雑作もないことだが、おれには親兄弟に對してこの雑作もないことさへ出来ないよ。」

「妙ですね。私など誰れからでも親切な手紙を貰ふと悦うれしいし、此方から書いて送るのもいゝ氣持がしますわ。」

「おれはさういふ手紙でも眞まに受けられないから困るよ。おれには母の氣持はよく讀めてゐるつもりだ。おれの疝性のためにお前が困つてるだらうと案じたらこそ出し抜けにあんなお札なぞ寄越したんだよ。自分の子息むすこや娘には碌な嫁も婿むこも得られないと思つてたんだから、お前などに對しても、腹の中ぢや随分氣兼ねしておどく／＼してゐるんだぜ。」

「まさか。……」おたねは信じかねたらしく笑つてゐた。



「いや本當だぜ。だから母は仕合せな人ぢやないのさ。十六七からあの家へ來てゐながら、今だに離縁さりやしないかと心配してゐるんだから。」

戯談じょうだん

としてゐるらしい妻の顔付に氣づくくと、良吉は口を嚙つかんだ。そして、おたねがその手紙を出しに出掛けた後で、再び書きかけの卷紙に向つて筆を握つたが、妻の書いてゐたやうな平凡な文句だけでも書けなかつた。……見ず知らずの讀者に向つてさへ、時としては冷笑されるのも構はずに、自分の衷ちゆうしん心の苦しまい思ひなどを頻りに吹聴したりする良吉は、誰れにも勝して眞心から聽いて呉れる筈の母親に宛て、心のうちを打ち明けることが出来なかつた。

「田舎の老女なぞに我々の肝心な思ひが解るものか。」といふやうな思ひ上つた考へはこの頃の良吉には餘程消えてゐるのだけれど、今もなほ率直に母などに訴へることも話すことも出来なかつた。社會とか國家とか歐洲の戦争とか自分の事業とかに關つた六ヶ敷問題は、差し當つて念頭に迫つてゐるのではなくつて、彼れの今の心の悩みもつまりは假名で言ひ現されるほどの簡易なものだつた。

母親は頭の中に起つたことを持て餘して來ると、よく庭の隅や物置の隅に蹲んで首垂れてゐた。うなだ良吉は一日の過半は机の前に首垂れてゐる。……首垂れてゐる二人の氣持に相違はなさうだつた。それでありながら、母と子とは面と向き合つてゐる時でも、

言葉によつて互ひに心を開いて見せることはなかつた。遠く離れてゐる間は、三年でも五年でも互ひに手紙の遣り取りをすることはなかつた。

かうして、神は愛であらうとも世は愛であらうとも、頭に白髪の毛の出来た良吉は机の前に首垂れて、永久に物狂はしい寂しさをつげなければならなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「正宗白鳥全集第六卷」福武書店

1984（昭和59）年1月30日発行

底本の親本：「早稲田文学 第二百二十八号」東京堂書店

1916（大正5）年7月1日発行

初出：「早稲田文学 第二百二十八号」東京堂書店

1916（大正5）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：山村信一郎

2014年12月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 母と子

正宗白鳥

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>